

「えぞうぶ」復刊 たなか踏基

その年の同期会は、五年振りに七月九日～十日、松本市里山辺の美ヶ原温泉郷のホテル翔峰が会場であった。今回私は始めて参加した。昭和三十五年（一九六〇年）に高校を卒業した同期生、卒業以来の四十五周年の集いである。卒業五年毎に開催してきたようであるが、私は今迄一度も参加したことはなかった。参加人数は、過去最高らしく、卒業生が約四百名中、恩師含めて百名程が集まった。郷里在住の友が中心になって、定年後郷里に戻った友も交え、企画してくれたようだ。約一割の四十名弱の友が既に亡くなっていた。翌十日は、『安曇野廻り』のバス観光が計画されていた。

私は目下、安曇野舞台にして、昨年三月癌で急逝した彫刻家、高校時代の友人をモデルにした小説、「奇妙な猫たち」を執筆中であつた。友の遺作、特に「瑠璃光寺」の「十一面観音菩薩像」をこの眼で事前にぜひ確認しておきたかったからに他ならない。私のHP安曇野随想録を読んで戴ければ、私の動機が少しは理解戴けるかと思う。更に拙著「奇妙な喫茶店」上梓の際に、小説舞台の喫茶店「まるも」のオーナー新田貞雄氏、拙著配本の鶴林堂書店の小松宏江社長に、色々とお世話になつたので、松本でご挨拶しておきたかつた。

八日早朝、カーナビをセットすると、関越長野道高速経由で松本に向つた。行程約四時間程で十時頃には、里山辺の姉の家に着いた。四十数年振りにバスで松本にでた。新田貞雄氏には、電話で予め連絡してあつたので一時間程面談できた。残念ながら、持参の菓子折りを店員さんに手渡しただけで、小松宏江氏には会うことができなかった。

た。新田老は、松本市の文化活動の生き字引的な存在の人で、臨死体験して生き返つたとおっしゃっていたが、九十歳と思えない程お元気な様子で、私には高校時代に逢つた当時のままの印象に思えた。本当に不思議で半世紀も変らぬ、奇妙な人である。「まるも」はクラシック音楽と松本民芸家の喫茶店として、市民にも御馴染であるが、あの場所であルゼンチンタンゴの曲が鳴り、まして新田老が、タンゴを踊つた人と、知つて居る者が果たして何人いるであろうか。私はてつきり、息子さんが店を継いだとばかり思っていたが、店はお孫さんの経営であつた。息子さんは、ブラジル女性と結婚後、日本に戻つて来ないので聞き、新田老の寂しさが心に沁みた。今度来松の折に「まるも旅館」に泊まってくれと懇願された。正に「奇妙な喫茶店」の奇妙な老人なのである。

実は、今回の松本行きにはもう一つ目的があつた。昔の同人雑誌「えぞうぶ（ハインソップ）」の復刊である。高校時代の文学部、新聞部、交友誌に所属していた、当時生意気盛りの友人六人で、同人誌を創刊したことがある。今回、拙著の上梓が縁となつて、往時の同人T君とネットで繋がることのできた。私の手元に、昔の「えぞうぶ」が無かつたので探してきた。今や素晴らしいHPの管理人でもある同人のT君が、幸い保存していた同人誌を送つてくれた。その友人T君と逢うことも、今回の大きな目的であつた。私個人としては、可能なら「えぞうぶ」を復刊してみたいと思つてきたからである。同人誌の表紙を描いた絵本作家の友とは、個展会場で賛意を得ていた。松本にいる他の仲間の意向を逢つて知りたかつたのである。T君とは、新田老との面談時にも同席してもらつた。私と新田老との弾む会話の遣り取りを、不思議

議そうに聞いていた。高校休学時代に新田老とは既に私が旧知の中であることを、T君は知らなかつたのである。三十歳も年齢の離れた者同志の会話に、割つて入れないものをT君は感じていたに違いない。私は時の迫るのも忘れる位であつた。

著名な源智の井戸近傍に住む、元同人で熟経営者のM君交え「茶か」で三人で昼飯を食べた。当時の旧交を温めながら、「えぞうぶ」復刊を話題にした。市民タイムスのコラムを執筆中で松本文化人の一人M君も賛同した。T君には、三郷村「瑠璃光寺」と、松本女鳥羽町「林昌寺」に連れていってもらふお願いを、出発前に電話でして頂いた。先ず「林昌寺」に立寄り、母校第三回卒業でもある二十三代川上一應住職に来意を告げ、もう一つの「十一面観音菩薩像」を拝観した。住職が、石像安置時の事を記載の「林昌寺寺報」のコピーをくれた。石像の寄進者は、明治九年開校開智小学校の建設の木工棟梁と縁の人であつた。「瑠璃光寺」で、四代目關榮淳住職と、息子の關恒明副住職と面談した。鐘樓の鐘の経緯、寺の開山経過、「十一面観音菩薩像」建立の経緯も取材できた。小説では彫刻家は仮名とするも、寺名、住職名を实名で執筆することの了解を得た。大王わさび農園に、彫刻家の友の初期五作品があるが、T君が、事前調査してくれていて案内してくれた。当初、「瑠璃光寺」は、自車で廻る予定にしていたのだが、土地勘のない私では果たして、取材成果を上げられたかどうか判らない。元「えぞうぶ」同人の友の取材協力あつたればこそで、全くT君には感謝の言葉も無いくらいである。次作「奇妙な猫たち」上梓や「えぞうぶ」復刊の際には、あながきの謝辞に、T君の協力のこと